

ら二三年の間にも見られた。出来たばかりのアンカラ政府は持続して他のイスラーム世界から支持を得られるのか、またトルコ民族運動はイギリスに妥協しないのか、こうした点を判断するのにソビエト・ロシアは驚くほど慎重に時間をかけた。大使も派遣せず各種援助の供与を引き延ばしていたロシアがいざ決断すると、逡巡は去り、トルコ共産党はじめ地元の社会主義運動や匪賊の類の民衆運動を切り捨てるのも早かった。

オバマ大統領は、かつてのロイド・ジョージやカーゾンと比べるなら、中東問題の処理法に驚くほど淡泊という他ない。秘密諜報部員の経験をもち策謀渦巻く中東の特性も理解するブーチンにとり、これほど御しやすいアメリカ大統領もいないだろう。オバマは、シリアの Assad 政権が市民虐殺のレッドラインを越えるなら、軍事干渉も辞さないと高らかにトランペットを吹いた。しかし、エジプト民主化の行き詰まりと軍政の台頭、第五艦隊の基地を置くバーレーンへのシ

リア派宗教指導者による民主化要求にも直面し、もともと整合性の乏しいオバマの中東政策が挫折するモーメントをブーチンやラヴロフは見逃さなかった。

シリア危機であれ、アラブの民主化変革であれ、湾岸安全保障であれ、オバマの対応は民主主義者レベルの思いつきであり、どこにも首尾一貫した戦略性が感じられないことを見抜いたのである。

ロシアの相対的に安定した外交能力は、オバマの隙を見逃さなかった。しかしブーチンといえども、ロシアが現実に行使できる力を無視して、オバマ政権の弱さを逆手にとるほどの力量をもつわけではない。ブーチンに可能なのは、中東におけるロシアの歴史的な役割や威信を人びとに思い出させ、そのプレゼンスを感じさせる点までであった。シリアを軸にアメリカとのバランスを復活できれば良しとしなくてはならない。それでも、オバマが言葉だけにせよ公言したシリアへの武力行使を無期限に延期させ、アサド大統領の退陣を化学兵器の廃棄問題と

すり替えたロシア外交の巧妙さには脱帽するほかない。

中東では予期しなかった事件が突如として起こる。驚きには慣れたアラブやイスラエルの人びとでさえ、シリア市民の人権や反体制勢力の抵抗へのこだわりがいまや、化学兵器の廃棄と査察の問題に紙面や画面の大部分を譲るのを見ては、啞然たらざるをえないだろう。

中東の国際関係におけるロシアの強みは、すべての関係国や当事者にコネクションをもっていることだ。これは、かつてのイギリスと同じようにアメリカにもない特性である。シリアとイランはもとより、南レバノンのヒズブッラー、パレスチナのハマスと直接に関係をもてるのはロシアだけである。ロシア系移民はじめソ連からの移住者の多いイスラエルは、ロシアが情報収集や人脈形成の中心として中東国家なのである。

ロシアの持ち味は、特定の国に屈服を強いがちなアングロサクソン流のハードな交渉による解決ではなく、自国のグロ

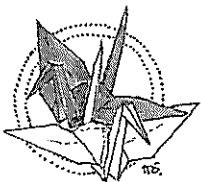
ーバルな影響力と各国の自負心を満足させる妥協や調停を図る巧みさにある。もつとも、調停努力を重ねても、かつての湾岸戦争やイラク戦争、イスラエルによるヒズブッラーとのレバノン戦争やハマースとのガザ戦争のように、失敗に終わる事例も多い。また、中東の関係当事国や団体は、回りくどいロシアを相手にするのを嫌い、じかにアメリカや NATO との交渉を望む事例も少なくない。しかし、アメリカとは異なるロシア外交の特徴は、ソビエト時代も含めて、価値観やイデオロギーの外交でなく、レアルポリテイク(現実政治)の外交に徹する点にある。

イランの核開発を批判しながらイスラエルの核保有に寛容な、アメリカのリベラルな民主主義を至上の価値観とするイデオロギー外交は、イランやアラブの立場から見れば偽善や虚偽かもしれない。アングロサクソンの価値観とリベラルな民主主義のイデオロギーに、イスラームの歴史と伝統で培われた中東の国々が妥協を余儀なくされるのは苦痛なのだ。ましてや、価値観の押し付けは逆効果を生むことが多い。民主化運動が進み良質な政権ができるはずのリビアやエジプトやシリアの氣息奄々たる現状を見れば、その逆説がよく分かるというものだ。

中東政治や国際舞台に主役として本格的に復帰することは近未来でも難しい。ことにソ連邦とワルシャワ条約機構の解体で力と威信を失ったロシアの軍部は、いまのところ国際政治の二極や三極になる力が乏しいことを知っているからだ。さて、小著は、ロシア革命の渦が招いた第一次大戦直後の混乱期に外交と軍事に共通するソビエトのレアルポリテイクをトルコ革命の視点から逆に眺める試みともいえよう。いまだにソ連邦解体の余波がくすぶる二一世紀前半の中東国際関係の理解に、英米仏中心の視野でない別の見方を示せたとなれば幸いである。

(やまうちまさゆき・明治大学特任教授)

# 觀察せよ、そして時機を待つべし



山内昌之

すぐ隣りの国でありながら、その影響力を過小評価するか、あえて正確に見ようとしなないのは、国益の上でマイナスである。日本にとってのロシアは、中国や韓国と比べると、遠い隣国のイメージのままである。

これほどではないにせよ、中東とくにアラブの人びとは、ロシア帝国やソビエト連邦を隣人として認識したことは少ないのではないかと。もともと、カフカースのチェルケス人やグルジア人たちが奴隸軍人として、イスラームの歴史に大きな役割を果たしたことを考えると、ロシアはアラブの内なる存在でもあったのだ。ましてや、ロマノフ朝のロシア帝国

に領土を蚕食され続けたオスマン朝のトルコやガージャール朝のイランにとつて、ロシア史は自分たちの歴史の一部でさえあった。

しかし、ロシアの中東関与を、領土的野心と南下政策からだけ見るのは正しくないだろう。それは、長年に亘って英仏と東方問題やグレートゲームで競合してきた結果、外交と軍事の複合化した戦略の産物だったからである。この戦略性の一面は、ロシア革命によって帝国がソビエト連邦に変わっても、受け継がれた。

そして、ソビエト連邦が解体して現在のロシア共和国になると、中東戦略も受動的な性格を帯びながら歴史的伝統性を継

承しているかのようだ。

今回出版した小著『中東国際関係史研究』は、副題が示すように、トルコとロシアが二つの革命を経験する大変動期中東とカフカースを舞台にしている。そこで、明らかに変わったのは、ロシアの中東関与が意外なほど受け身であり、カフカースに対する積極攻勢を取引材料にソビエトへ譲歩を求める新生トルコの指導者ムスタファ・ケマル・パシヤやキャズィム・カラベキル・パシヤの戦略に押されがちな姿であった。

ロシアの伝統的に慎重な姿勢は、ゴルバチョフ・ソ連邦大統領の最終年の湾岸戦争当時にも現れていた。これとは裏腹

に、積極的な印象を与えがちなロシアのブーチン大統領は、確かにベルシア湾岸やイランの安全保障に関心を深めており、シリア危機でも存在感を發揮している。彼は、中東の旧ソ連邦勢力圏の孤塁シリアを守り、国益優先の新たな外交ヴァイジョンを示そうとしているかのようだ。しかし、それは武器輸出の顧客や地中海の海軍基地タルトゥスの確保といった実益次元のことだけではない。

そもそも、現在のロシア外交にとつて、中東の優先順序は、ヨーロッパ、アジア、「いちばん近い外国」と俗称された旧ソビエト諸国よりも劣るのであった。二〇〇四年にラヴロフ外相は、ロシアの政策は親アラブでもなければ親イスラエルでもないと当然至極ながら国益第一主義を確認したことがある。ロシアの安全保障にとつて死活の「いちばん近い外国」が不安定になるか、ロシアの脅威になると見ると、国益の優先順序を考慮して自らの別の利益を犠牲にすることを躊躇わなかった。

カフカースから中東にまたがるグルジアは、サーカシヴィリ大統領の下で独自の石油パイプライン敷設や南オセチアやアブハジアの領土問題をめぐってロシアと戦火を交えた国である。その国がイスラエルから軍事支援を受けそうと見るや、すぐさまイランに提供するのは300防衛システムの売却を取り止めるという思い切りのよさであった。この選択はロシア外交の優先順序をこよなく示しているといえよう。

今度の新著でも触れたように、ソビエト初期においても、トルコがイギリスの影響下に取り込まれそうとみるや、思い切ってアルメニアやグルジアの領土をトルコに譲ることも辞さなかった。トルコを軸に旧オスマン帝国のアラブ圏や、イランはじめイスラーム世界の民族運動をイギリスに反抗させる点こそ、ソビエトのグローバルな戦略の最優先事項だったからだ。そのためには、カフカースや中央アジアの外郭線の安全保障と領土保全を大局的に図りながら、一時的な退却を

正当化する強さがソビエト・ロシアの戦略にはあったのだ。

ブーチンと外相ラヴロフの姿勢は、積極的に自分の方から外交のイニシアチヴを發揮して国際的に大きな失敗を招くのを避ける慎重さで際立っており、新著で触れたソビエトの外務人民委員チチェーリンの立場と似通った面もある。かれらに共通する外交姿勢を、カイロ大学の政治学教授タリク・ファフミーのひそみに倣って表現するなら、「じっくり観察せよ、そして時機を待つべし」という点に尽きるであろうか(『アッシュヤルクルアウサト』紙二〇一三年十一月四日)。

チチェーリンが子細に観察し反応をうかがった大国がイギリスでありロイド・ジョージ首相やカーゾン外相だとすれば、ブーチンとラヴロフが忍耐強く動きを待ち続けた相手はアメリカのオバマ大統領にほかならない。

ロシアが対抗する欧米の大国の立ち位置を検討し、コストベネフィットを分析する手法は、小著が扱った一九一八年か